ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（26）

「みごとなものでございます！
おきれいです！　すばらしゅうございます！」

　こういう言葉が、人々の口から口へとつたわっていきました。みんながみんな、心から満足しているようすを見せました。

　皇帝は、うそつきどものひとりひとりに、ボタン穴にさげる騎士十字勲章（きしじゅうじくんしょう）をさずけ、また、

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（27）

ごようおりものしょう
「御用織物匠」という称号をもあたえました。

　うそつきどもは、行列のおこなわれる日の前の晩は、ろうそくを十六本以上もつけて、一晩じゅう起きていました。ふたりが、皇帝のあたらしい着物をしあげようとして、いそがしく働いているようすは、だれの目にもよくわかりました。ふたりは、織物を機から取

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（28）

りあげるようなふりをしたり、大きなはさみで空（くう）を切ったり、糸の通っていない針でぬったりしました。そうしてしまいに、

「ようやく、お着物ができあがりました」と、言いました。

　皇帝は、身分の高い宮内官（くないかん）を連れて、そこへ行きました。すると、うそつきどもは、なにかを持ちあげようとするように、片方の腕を

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（29）

高くあげて、言いました。「ごらんくださいませ。これが、おズボンでございます。これが、お上着でございます。これが、おがいとうでございます」などと、さかんに申したてました。

「このお着物は、まるでクモの巣のように軽うございます。ですから、お召しになりましても、なにも着ておいでにならないような

ハンス・クリスチャン・アンデルセン
矢崎源九郎訳

はだかの王さま（30）

感じがなさるかもしれません。しかしながら、それこそ、このお着物のすぐれたところでございます」

「さようか」と、宮内官たちは、口をそろえて言いました。けれども、もともと、なにもないのですから、なんにも見えませんでした。

つづく